



Title	鷗外初期文芸の研究
Author(s)	青田, 寿美
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40508
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	あお たい す み 青 田 寿 美
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 3 5 8 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 10 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学 位 論 文 名	鷗外初期文芸の研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 助教授 出原 隆俊 (副査) 教 授 伊井 春樹 教 授 中村 元保

論 文 内 容 の 要 旨

鷗外の明治20年代前半の文学活動について、従来、看過されてきた資料の調査や見落とされてきた分野の検討、同時代の文献の博捜を通して、Tragödie＝悲劇への希求の一貫性という角度から、その独自性を明らかにしようとしたものである。鷗外の文学については、悲哀性が指摘されてきたが、鷗外は明治20年代前半において、同時代の文学を支配する悲哀性とは明確に対立するものとして悲壮性を追求した事を論証する。

序においてそのような問題のありかに触れ、第1章「初期訳業考ードイツ短篇小説理論とクライスト受容をめぐるー」、第2章「鷗外手記資料「詩学材料」に関する覚書ー美学論への射程 その一ー」、第3章「＜悲壮＞をめぐる断章ー美学論への射程 その二ー」、第4章「鷗外の＜Tragödie＞観ー初期文芸評論を中心にー」の4章から成り、それに付章として「Tragedy, Comedy の訳語誌」を添える。400字詰め原稿用紙で、およそ400枚の分量である。

第1章では、鷗外の手沢本「ドイツ短篇集」のハイゼの序論と、それに依拠した鷗外の評論との異同の問題や鷗外の書き込みの実態、さらにはクライストの小説を脚色したケルナーの戯曲の翻訳を鷗外が中絶した実態の考察などから、鷗外はクライストの作品を重視しており、それはその「脅威的な運命の力ゆえに、冷酷かつ荒涼たる様相を呈する」悲劇に惹かれたからだと論じる。そのことを通して、鷗外の実作「舞姫」、「うたかたの記」における女性主人公の悲劇性を重視すべきだとする。そして、鷗外の西洋文学受容が「啓蒙的意図」に留まるものではなく、「作家の主体に深く関わるもの」であると結論づける。

第2章では、現在は失われてしまった「詩学材料」の「原本の形態を類推し得る資料」を論者が初めて明らかにした。そして、「鷗外がゴットシャルの「詩学」と並行して東洋詩学関連の漢籍を繙読していた」「具体相の検討」をする。そこから、鷗外の初期評論について、「西洋詩学を中核とする美学体系の整理」のみでは不十分である事を検証する。

第3章では、鷗外がTragödieを悲壮戯曲と訳した事の意味を考察する。鷗外全集に未収録の手記断片「文がら」に「悲壮定義」という書き込みがあることを示した上で、それが鷗外の言う「悲劇の本真」と深く関わっている事を論じる。そして、悲壮という言葉が同時代においてどのように使われていたかを解き明かす。「詩学材料」における悲壮という言葉が「氷川詩式」に由来する事などを示し、さらにこの言葉の後世への影響にも言及する。このようにして、悲壮、崇高という「美の概念」を「体系的に把握」しようとした鷗外の試みの意義を明確にする。

第4章では明治22、3年に鷗外が関係した文学論争を貫くモチーフを明らかにし、同時代の中での鷗外のTragödie

観を検討する。「音調高洋箏一曲」の中断の意味を検討し同時代文学への鷗外の認識を明らかにすることから展開し、「罪過論争」の重要性を説く。石橋忍月との論争において「＜人性戯曲＞とは位相を異にする＜運命戯曲＞独自の＜悲壮＞性」を提示したとする。佐倉惣五郎像の評価にも触れながら、「人生の羈絆を脱離」して「滅亡に就く」ところに悲壮性があるとの鷗外の言葉が極めて重要である事を論じる。それが「舞姫論争」と関わってくる事を指摘し、女性主人公の「運命悲劇」としての「舞姫」読解の可能性も提示する。

付章は辞書や雑誌を広範に渉猟し、「悲劇」という言葉の出現時期についてのこれまでの定説を改めている部分もある。

論文審査の結果の要旨

本論文は、森鷗外の明治20年代前半の評論活動と翻訳・創作活動の全体を貫く基底を、同時代の文学動向と照らし合わせながら究めようとしたものである。個々の評論文の検討、個別の作品論の展開といった従来の成果に留まらず、この時期の鷗外の総体を捉えようとする強い意欲に満ちているといえる。

それにあたって、従来の研究者が、困難性のゆえにか回避していた資料に正面から切り込んでいく姿勢は高く評価されてよい。日本近代文学研究が隆盛であるかの観を呈しつつ、なお、基本資料をお座なりにしている事への警鐘ともなる。

取り分けて、鷗外における東洋詩学の重要性の指摘は、貴重なものといえよう。また西洋文学論の受容の問題についてこれまで看過されてきた細部に目を配り、新たな視角を獲得した事も見逃せない達成である。

また、悲壮という言葉を経節点として、各章が有機的につながってくる論の展開も説得力を持つものといえよう。評論・翻訳・創作を総合的に見渡すことはほとんどなされなかったことである。この言葉とその周辺の言葉の同時代における使用の実態の調査も他に類を見ないものであり、あいまいな印象批評めいた論考などを排する十分な根拠となりうるものである。

全体として、森鷗外研究に新しい視野と方法をもたらしたと言え、本論文の意義は十分に評価されるべきである。しかし、鷗外の悲劇性への関心の傾斜について、実生活の問題をやや安易と思える形で援用する点など、再検討すべき余地もあろう。また、「鷗外初期文芸の研究」と名乗る限りにおいては、まだ達成すべき課題も少なくない。たとえば、悲劇性という中軸のみでは掬えない鷗外の小説の豊穡さの問題があろう。美的表現の達成度、比喩表現の巧みさや様々な仕掛けといったものにも目を向ける必要がある。女性にとっての「運命悲劇」として「舞姫」を読むという事についても、問題提起の域に止まっている。

また、悲劇論という視点では、本論文の考察対象とはやや時期がずれているとはいえ、北村透谷の存在などは見落とせない。鷗外の独自性を指摘するためにも検討は避けて通れない。より広い文学史的考察が望まれる。

今後に期待する課題も多いが、そのことは本論文の達成度の評価を低めるものではない。

なお、平成10年2月18日に本論文の公開審査を終え、学力確認をし申請者は合格した。本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するものと認定する。